



## 「毎年やる意味があるのか」(宮城県知事) **全国学力テスト** 「意味があるのか分からない問題を解かせられながら、 平均正答率で並べ比べられる」(滋賀県知事)

4/23 日(木)を中心に全国学力テストが実施されます。

### 2027 年度以降は CBT 全面実施、

文部科学省は、2027 年度以降の全国学力テストの実施について、右表の主な内容の方針を打ち出しています。

CBT(コンピュータを使った試験)を全面実施することが大きな特徴で、すでに昨年度の理科で実施、「生徒質問調査」は 2016 年から実施されています。

今年度は中学校英語を CBT によるテストが別日も含め 3 コマの時間で実施されます。

### 学校、子どもに「利便性」「負担軽減」？ 子どもごと異なる問題でも学力比較可能？

CBT によるテストは、出題や採点がオンラインで行われるため利便性が高いとされ、国際学力調査などでも導入されています。

CBT では児童生徒ごとに異なる問題を出題でき、学力の違いや問題の違いがあっても、IRT(項目反応理論)で分析するため、受験者の学力スコアを比較・推定できるとされます。

そのため、テスト実施も分散できるうえ、学校外や自宅でも受験可能とされます。

学校・先生や子どもにとって、大きなメリットがあることが、文科省から強調されています。

### CBT 化の本当の「メリット」は、「ビッグデータ」の収集、利活用！？

しかし、文科省が CBT 化のメリットのトップに掲げるのが「ビッグデータの活用」です。

ビッグデータを活用の具体的な中身はまだ示されてはいませんが、教育 ICT 企業では教育ビッグデータをもとに学習システムの開発に力を入れており、先生の授業でなくタブレットで子どもたちが「個別最適」学習を可能にすることをめざしています。

さらに教育 ICT 企業では、教師のタブレットや端末から、授業の「先生へのアドバイス」(指示?)が行われるシステムの開発も目指しているとされます。「ICT 先進国」のアメリカなどでは、すでに、上記のような学校が広がり、先生たちは、すぐに取り換え可能な業務に変えられていこうとしています。

学びポケットを通して蓄積される子どものデータ、情報もどのように利用されるか、不安はぬぐえません。便利だ、らくちんになると思っていたら、想像もしない景色の中に連れていかれてしまう。そんな懸念さえ現実味を帯びてきます。

### 全国の知事などからも大きな批判、「続ける必要あるのか」

2024 年に宮城県の村井知事が「(全国学力テスト)毎年やる意味があるのか」、滋賀県の三日月知事も「意味があるのか分からない問題を解かせられながら、平均正答率で並べ比べられる」と問題提起していました。文科省も学力テストの在り方を検討する会議で「都道府県のばらつきが極めて狭い範囲にとどまっており、

### 2027 年以降の全国学力テスト

- ① 小・中とも全教科を CBT で実施  
2026 年は、中学英語を CBT で実施
- ② 全国同日でなく、実施日程を分散設定
- ③ 児童生徒ごとに異なる問題セットを割り当て、IRT を活用して学力を分析。

順位付けにこだわるのは過剰な反応と考えられる」として、全国学力テストの結果公表の在り方を検討したものの、今後も都道府県別の結果公表は続けることになっています。

全国的にも学校や自治体で「対策」に追われ、「改善」と称して、授業の中身がますます子どもたちの実態や興味関心から離れていくようなことにもつながっています。

全国学力テストには毎年約 50 億円がぎ込まれ、タブレット端末や ICT 学習システムにも多額の政府予算が投入されています。

しかし、子どもたちや現場の教育にとって最も必要なのは、欧米並みの少人数学級、教員定数の大幅増です。テストや ICT よりも、人にもっと予算をぎ込むべきです。

オンライン署名を広めましょう



「子どもを苦しめ、教育活動を歪める全国学力テストの参加強制に反対します！」



## 奨学金利子が上昇、325倍の例も、子どもにもっと予算を

奨学金の利子が大幅に上昇しています。

中には、大学卒業時 0.004%(2021 年)だった利率が、5年ごとに行われる今年 3 月の見直しで、1.3%になり、325倍にもなっているとされます(有利子貸与の第二種、変動金利型)。

返済中利子の変わらない固定金利型でも 22 年 3 月の約 0.4% から、26 年 1 月は約 2.5%に上がっており、住宅ローンよりも高くなっているとされます(新規借入時の金利)。

大学生の多くが利用する日本学生支援機構の貸与型の奨学金は平均 354 万円を借り入れ、15 年返済になっているとされます。

卒業時に多額の「借金」を抱え、金利上昇でさらに返済額が膨らみ続けてしまう。子どもの将来にかかわる重大な問題となっています。

### 大量の国債、積極財政、世界情勢の不安定化で「長期金利」上昇

奨学金利率の急上昇の要因としてあげられるものが、政府の国債の大量発行、イラン攻撃はじめとした国際情勢の不安定化といわれます。

これらが「長期金利」といわれるものを押し上げ、有利子奨学金の財源としている、金融機関からの借り入れ利子が連動して上昇しています。

かつて大学生の奨学金といえば「日本育英会の奨学金」とされ、その資金は政府の公的資金で運営され、ほとんどが無利子で、様々な「返還免除」の仕組みもありました。

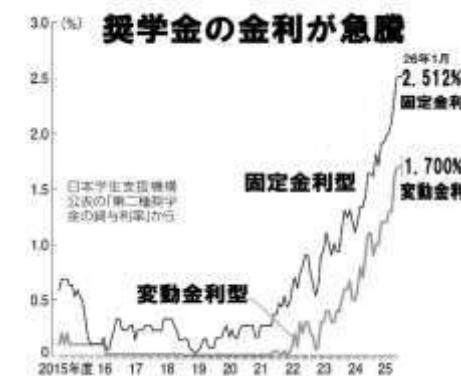
しかし、小泉政権で「日本学生支援機構」に移行し、現在の有利子貸与が主流の形に変えられてきました。

### 大企業、軍拡には予算つぎつぎ増額、奨学金には……

奨学金返済での督促は極めて厳格に実施され、日本学生支援機構は 97%の回収率を「誇って」います。欧米諸国では 2~3割の奨学金貸し倒れを見越しているのと対照的です。

高市首相は先の国会で新年度予算を成立させ、防衛費の異常な膨張、企業支援には多額の予算を計上しても、奨学金の仕組みを変えようとする姿勢は見られません。ましてやトランプ大統領の機嫌を損ねないように、政府の公的資金を何十兆円も「対米投資」として差し出そうとしています。

国民消費税で多くが賄われる政府予算、国の公的資金は、が国民生活の安定、子どもたちの未来のためにこそもっと投入されるべきです。



## 新学期スタート「忙しすぎる」「詰め込みすぎる」「何でも前倒しに」 重要な先生、子ども、保護者との関係づくりが後回しに？

新学期スタート1週間に、あまりの忙しさに、組合会議の参加者もへとへと状態に。それこそ「モーリ」に近い声が聞こえてきます。

- 「とにかく仕事が終わらない、毎日8時まで残業、土曜も7時まで学校で仕事してもまだ追いつかない」
- 「講師未配置でダブルカウントができず35人超学級で、子どもたちに間が行き届かず、対応も大変」
- 「4月初めの多忙な時期に、余裕ない中で校内研究の研修がもう実施」
- 「会議がとにかくたくさん入って、年間の仕事を前倒しで取り組むので、余裕がなく、子どもの顔見ている暇がない」「授業の準備まで行きつかない」
- 「業務が集中して、Teamsで連絡や指示が増え、見る余裕もなく、先生どうしも、ゆっくり話や交流ができず、関係性がぎすぎすならないか心配」

日程が極めてタイトな中で、4月の初めに業務が集中、仕事がたくさん詰め込まれて、対応が求められるため、息つく暇もなく毎日が過ぎていきます。

学校生活の「1年間のマラソン」を「短距離走の全力疾走」でスタートしているような状態といえます。

### 人間が追い付かない急増する業務量、情報量 メンタル不全、パフォーマンス低下に

政府でも、学校現場で課題が増えることで「処理するデータ量が従来より飛躍的に増加」(総務省「教育分野におけるPDSに関する参照文書」)と指摘されています。脳科学者の間でも「人が同時に扱える情報は4つ前後」と言われており、一方で人間の脳そのものはこの1万年で、基本的には変わっておらず、飛躍的に増加する情報量、業務量に、脳が追い付いていないといわれます。

結果的に、「情報オーバーロード」となり、一つ一つの業務で、集中力、判断力、生産性などのパフォーマンスが低下する。心身に大きなストレスがかかることが指摘されています。

深刻な教員不足の中、情報量、求められる課題の飛躍的な増加の上に、毎年4月初めに一気に決着をつけるような学校業務の在り方、それを求める教育行政の姿勢が問われています。

### 最も重要な関係作りに必要な「ゆとり」「人間的交流」を生み出せる職場に

忙しさの中で、さらにICTで大量の「情報共有」が一方通行で行われることが増えている職場の中でも、思わぬ気持ちのすれ違いも生まれやすくなります。直面する困難な状況を聞いてもらい、一緒に対応してほしいという気持ちも表に出せず抱え込んで、より難しい状況に……。こんなことすら懸念されます。

「保護者とどう付き合うか」(朝日新聞3月連載)の中でも、大阪の教員の声を紹介。「一部の保護者への『対策』だけでなく、生徒指導、保護者対応は信頼関係が重要。担任外の先生がもっといけば、ゆとりをもって保護者と向き合えると」指摘しています。

「(一方通行の人間関係ではなく)、子どものためにも『折り合いをつける姿を大人が見せる必要性』が保護者や学校側にも重要」「(先生の業務で)削るべきは何なのか、保護者と本気で向き合い、子どものために心を砕く役割を先生にお願いしたい」という教員経験者、保護者の声も紹介しています。

次の言葉で紹介されるような人間関係づくりが可能になるように、現場にゆとりと余裕を生み出すことが不可欠であり、教育条件、行政からの課題の見直しこそ重要です。

**嫌われていると思ったらそうじゃなかった、責められていると思ったらけど分かり合えた。**

**AIでは起こりえないこうした逆説的な対人経験が、人の心の回復には大切だという。**

スクールカウンセラー・臨床心理士 東畑開人

こんな取り組みも・・・

## 兵庫県朝来市「4月中は5時間授業」で負担軽減

兵庫県朝来市では、今年度から小中学校とも4月中は4時間授業にすると教育委員会が決定しています。朝来市では従来、6時間授業は小4～6と中学校で週4日、小学2・3で週1～3日。小1は6時間授業がありませんでした。4月の入学式、始業式は小中ともに、7日始業式、9日入学式となっています。市教委の担当者は「4月は児童生徒にとって心理的負担が大きい時期で、不登校などにつながるリスクもはらんでいる。」

進学に伴う変化に戸惑う「中1ギャップ」「小1プロブレム」が問題になっており、気持ちにゆとりを持たせることで、進学、進級に伴う環境変化による負担を軽減、「五月病」対策の一環にもなるとしています。

学校現場に工夫や努力を求め、心がけを強調するだけでなく、教育行政が対応できることは、まだまだあります。

### 2026第2回まなび庵

## 「楽しみながら、生きる力を育てる自立活動」

講師 谷野幸江さん(菅原東小) 他

5月9日(土)14:00～

ラポールひらかた 3F 第1研修室 資料代 300円

子どもたち一人ひとりの実態は異なり、抱えている困難さも千差万別です。「集団になじめない」「気持ちの切り替えが苦手」「手先が不器用」……。その子に今、本当に必要な指導は何なのか。

どうすれば楽しみながら、生きる力を育むことができるのか。先生方の「引き出し」を増やし、明日の授業づくりに生かせるアイデアや教材がたくさん。

支援学級だけでなく、クラスの学級活動にも生かせます。

どなたでも参加できます。

当日参加歓迎。保育もできます

事前参加申し込み QR



### 枚方教育4月9日付2008号記事の訂正について

ニュースの記事中、間違いがありました、次のように訂正させていただきます。

(枚方市は)「例年4/4小学校、4/5中学校入学式のところ、」

→「昨年4/4小学校、4/7中学校入学式のところ」

「守口市は昨年まで(小:4/5(土)、中:4/6(日))」

→「守口は昨年は(小:4/5(土)、中:4/6(日))」